

鹿児島県西之表市

本城・田之脇遺跡調査概報

1973.3

西之表市教育委員会

市社会教育課

種子島開発総合センター

1. 遺跡の立地と環境

種子島西之表市の市街地は、西之表港に沿って海岸から後背地の台地のすそにかけて、旧種子島家の城下町を中心として発達した市街地である。松島本城部落は、市街地の北方に位置し、台地のすそに形成されている小丘陵上に発達している部落で、本城遺跡はこの部落内、小丘陵上の一角にあるが、この小丘陵地帯は砂地をなして、もと海辺からの吹きあげによって形成された砂丘であったと考えられる地域である。

遺跡は、小丘陵地を開析して海州から市街地を通り後方の台地(上原台地)へ走向している県道西之表・国上線に沿って、旧熊毛郡連合家畜協同組合敷地跡(現在は住宅地)があるが、遺跡はこの協同組合の敷地一帯で、標高約10m程を示している地点である。(第1図)



遺跡の中心部と推定される地点は、組合敷地の整地によって大半が破壊されているらしく、敷地の周辺部にある土壌に残存しているだけであったが、調査中に、県道から分かれ榕城小・中学校へ

通ずる小道路（通称 堀の坂）に沿う土塁や市道本城線に沿ってある亜熱帯植物園近くからも土器片が発見されたことから、相当広範囲にわたった遺跡であったことが推定できた。

本城遺跡が縄文式の會知式土器を出土する単一遺跡であることは早くより知られていて（注1）、兩西諸島における縄文時代前期の解明にとって重要な遺跡の一つとして注目されていたところである。西之表の市街地からは納骨の縄文遺跡や石斧等が土地の人達によって発見されているが、後背地の上原台地上の出口付近では、種子島実業高校敷地およびその周辺に縄文時代寒ノ沖式土器の包含層や弥生式土器の散布地などが知られている（注2）ことから、本城遺跡周辺一帯は、縄文時代から弥生時代にかけて長期間にわたる生活の跡であったことが予想される。

種子島における會知式土器の出土地は、西之表市では本城遺跡の他に園と寺之門、横山農事試験場地、現和に、中種子町では二十番、増田千草原などに知られている。また屋久島では一澳の砂丘遺跡が知られている（注3）。現在までの調査結果では、種子・屋久が會知式土器の兩限の地であると考えられる。

2. 調査までの経過

本遺跡が、旧熊毛郡連合家畜協同組合の敷地内にあることは、故種子島時望氏等によって早くより知られていて、昭和24年には荻川清亮、佐竹忠七、江口清厚氏等の西之表市在住の同好者によって若干の遺物が採集されている。同じ頃、三友国五郎氏も同遺跡の現地調査によって遺物を採集され、熊本県會知具出土の土器に類似していることを確認された。その後、27年8月には三友・國分・河口氏等によって発掘調査がなされ、會知式土器出土の単一遺跡であることが報じられ（注4）、屋久島一澳遺跡（注5）とともに、兩西諸島における重要な縄文遺跡として注目されていたところである。

昭和34年に西之表に市制が施行されたが、市はその記念事業の一つとして、この遺跡の発掘調査を計画した。調査は、34年3月と35年3月の2次にわたって実施したが、その結果、兩西諸島における縄文時代前期の解明にとって若干の資料を得ることができた。

調査にあたっては、次のような編成で実施した。

発掘主体者	市長	西村 健 夫
総 務	市教委	教育長 古 市 清 香
	社会教育課長	徳 水 勉
	社会教育文化係	平 山 武 章

第1次調査

調査期間 昭和34年3月21日～3月30日

調査員 盛岡尚季(責任者)・岡分直一・重久十郎

協力員 狩野友彦(榕城中教諭)

参加者 光文与志・中川淳・鎌田雅邦・鎌田隆信(以上 中種子高校生), 井上保(種子島高校生), 長田徳・橋野裕明・福元(以上 榕城中生徒)

第2次調査

調査期間 昭和35年3月23日～3月30日

調査員 盛岡尚季(責任者)・岡分直一・重久十郎

協力者 河内和夫(種子島実業高校教諭)・高口稔(野間中教諭)

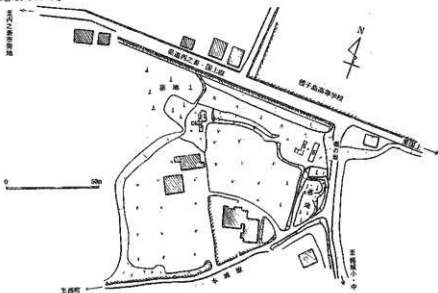
参加者 井上保・長田徳(以上 種子島高校生), 鍋木敏一(中種子高校生), 小波輝生・橋野裕明・福元(以上 榕城中生徒)

()の学校名は, 当時の学校名を示す。

3. 調査の概要

発掘地点は, 旧龍毛郡連合家畜協同組合敷地の南側と北側の敷地境界にあたる土堤で, 雑木が密生している地域である。

調査は第1次調査ではI～Vトレンチを, 第2次調査ではVI～VIIIトレンチについて実施したが, I～IVトレンチは前記土堤の北西隅



第2図 本城遺跡実測図

に、V～VIトレンチは北東隅に、それぞれ雑木が防風林としての役目を果たしているところから樹間の空地を選定してトレンチを設定した。(第2図)

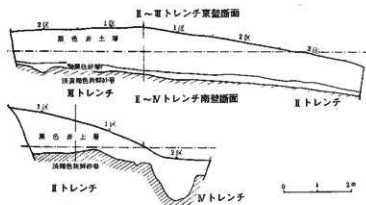
(1) I～Vトレンチの概要

I～Vトレンチ(48㎡)は、前記土塼の北西隅にあたる掘削道路に平行に、昭和57年度に三友氏等によって発掘調査された第2回発掘地点のトレンチに接して設定した。

調査は、Iトレンチ(2m×8)を掘削道路に接して平行に設定し、IIトレンチ(2m×8)はIトレンチの西側に、IIIトレンチ(2m×4)はIIトレンチの南側延長上に、さらにIVトレンチ(2m×4)は、IおよびIIトレンチの1区の西側延長上に設定した。

IIトレンチとIIIトレンチとの境界付近が中高で、Iトレンチは東側斜面、IIIトレンチからIIトレンチにかけては北側斜面、IIトレンチからIVトレンチにかけては西側斜面になっており、とくに西側斜面は急傾斜をなしていた。そのため、土塼の原地形に従い、その傾斜地表面に沿って調査を進めたが、IおよびIIトレンチの1区とIIトレンチの4区では、大樹根のため1部発掘不可能な部分もあった。

I～Vトレンチの全区にわたり攪乱のあとがみられ、明確な包含層は明らかでなかったが、ただII～IIIトレンチの南側壁面の実測図作成の段階において、表層下に黒色の砂層(10～30cm)



第3図 I～Vトレンチ壁面実測図

の層が認められたのみであった。層は表層と基盤との2層にわかれ、表層は黒褐色の砂質土壌をなし0.4～1.3mの厚さで、Vトレンチの3区では溝状のおちこみがみられた。基盤は淡褐色の新鮮砂層で、この層は全くの無遺物層であった。

(第3図 II～IIIトレンチ

東壁およびII～Vトレンチ南壁断面実測図参照)

遺物は、表土層直下から曾根式土器の細片とともに、現代陶片・瓦片・鉄片や青磁小片(I-1, I-2, II-1, III-2), 須恵器小片(I-1, I-2, I-3, III-1), 黒色磨研土器(II-3), 一湾式(I-2), 由來式(I-1)等の小片が混在して出土した。その他、土鏡(I-1)が出土した。

石器は、磨製石斧(Ⅱ-4)、打製石斧(Ⅱ-1)、石皿(Ⅰ-3と4の境界)に、また小形の棒状の敲石(Ⅱ-2)も出土した。全区にわたり黒曜石の欠片や砂岩、粗面粗粒玄武岩の角礫や欠片もひんびんとして出土した。

Ⅱトレンチではシイの実や暖海のコナラの炭化物も散見された。

骨角器の出土状況については、全体的に出土量が少なく何れも細片のみで各区とも散見される程度であったが、Ⅰトレンチの3区では割りに出土量は多かった。Ⅰトレンチの1区およびⅡトレンチでの出土は全くみられなかった。

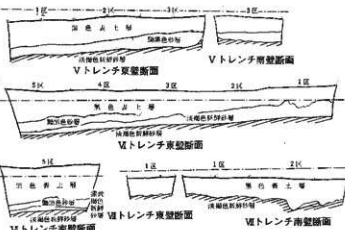
(2) V~Ⅵトレンチの概要

V~Ⅵトレンチ(5.25㎡)は、先述したように組合歌地の周辺にある土塚のうち北東隅に選定したが、この土塚はⅤトレンチ付近がやや中高ではあるが割りに平坦である。土塚の南側は組合歌地に、西側は隣接の基地に緩傾斜をもって接している、東側は通称「堀の坂」の市道入口付近に面して急崖をなし、北端は県道西之表・国上線に面して急崖をなしている。

トレンチは、土塚上で樹木の少ない最も広い平坦地を選定して設定し、土塚上の原地形に従って調査を進めた。

Vトレンチ(2m×6)は、表層と第2層および基盤の3層からなり、表層は黒褐色の砂質壤土で厚さ4.5~8.0cmで、南側から北側へ次第に厚くなっている。第2層は、黒色の砂層で2.5~4.5cmの厚さ、3層の基盤は淡褐色の新鮮砂層で表土面下1.1~1.25

mの深さにあり、全くの無遺物層であった。基盤上面は南側から北側へ緩傾斜している、この傾斜面に沿って上層の第2層・表層とも傾斜している。3区においてはトレンチの南壁面近くで第2層が消滅して

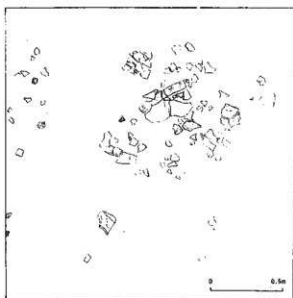


第4図 V~Ⅵトレンチ壁面実測図

いて、表層と基盤の2層からなることが明らかになった。(第4図 Vトレンチ東壁、南壁断面実測図参照)

遺物は、表土直下から骨角器の細片が散見されるが、第2層では1~2区においては細片が散見される程度であるが、3区の第2層の下位では出土量も多く割りに大きな破片が出土した。

(第5図)



第5図 土器出土状況 (Vトレンチ3区)

して第4層の基盤となる。

4区から5区にかけては、表層の厚さ70~95cmの黒褐色の砂質壤土下に、第2層の厚さ20~40cmの黝黒色の砂層があり、その下位に第3層の淡黄褐色の新鮮砂層と続くが、1区から3区にかけては、第2層は3区と4区の境界付近で自然に消滅し、表土層下40~70cmの深さで第3層の淡黄褐色の新鮮砂層となる。この淡黄褐色の新鮮砂層は1~5区を通じて表土面下0.5~1.15mの深さで、10~50cmの厚さを有し、第4層の茶褐色砂層の基盤となるが、この第3層および第4層は全くの無遺物層であった。基盤上面は南側から北側へ緩傾斜を示しているため、上層の淡黄褐色砂層および第2層もこれに従って傾斜を示している。(第4図、Vトレンチ東壁、南壁断面実測図参照)

遺物は、黒色表土層の上層にある樹根部直下から骨細式土器の細片とともに、現代陶片、須恵器(1区)および黒曜石の欠片が散見された。

骨細式土器は、1区において大形の口縁部破片が出土したが、全体的には1~2区および5区では出土量が少なく散見される程度で、3~4区では割りに出土量が多かった。

石器は1区ならびに2区で軽石に加工のあるもの、3区に砂岩類に朱痕のあるもの、扁平丸石、敲石が出土した。

Vトレンチにおいても黒曜石の欠片や砂岩、粗面粗粒玄武岩の角礫ならびに欠片が多く出土した。

Vトレンチ(10.5m²)は、Vトレンチに接して直角に2.5m×5mのトレンチを設定したが、1区において1m×2mがVトレンチの3区と重なった。

石器は、2区において小形の棒状の敲石や板状の板石に凹みのある凹石が出土した。

また、全区にわたり黒曜石の欠片や砂岩、粗面粗粒玄武岩の角礫・欠片がひんびんとして散見された。

自然遺物では、貝殻の細片が1個5区で検出された。

Vトレンチ(3m×10)は、Vトレンチに平行に、2本の大樹をはさんで設定した。

層は4層からなり、第1層は表層、第2層の黝黒色層、第3層の新鮮砂層、そ

層は先述のようにVトレンチの3区両壁において黝黒色の第2層が消滅しているため、表層と基盤の2層からなっていて、基盤は全くの無遺物層であった。

表層は無褐色の砂質土壌で厚さ50～60cmで、基盤である灰褐色の新鮮砂層となり、Vトレンチで観察された第3層の炭黄褐色の新鮮砂層は確認されなかった。基盤上面は凹凸があって乱れており、特に2区においてはおちこみがみられた。(第4図 Vトレンチ両壁、東壁断面実測図参照)

遺物は表土層直下から會畑式の細片が散見されたが、出土量は微弱であった。

石器としては2区に丸石が出土した。

なか、表層からは黒曜石の欠片が砂岩、粗面粗粒玄武岩の角礫をらびに欠片が多く出土した。

4. 遺物

(1) 自然遺物

IIトレンチにおいて、シイの実や暖海の海辺に積んでいるシャリンバイの木の炭化物を、Vトレンチ3区で貝殻の細片1個を検出したにとどまった。

(2) 人工遺物

石器

調査トレンチの全域にわたり、黒曜石の欠片や砂岩・粗面粗粒玄武岩の角礫・欠片などの打割られた石片が多量に出土した。これらは石器として利用したかどうかは明らかでない。

石器としては、磨製石斧(II-4)、打製石斧(N-1)、石皿(I-3と4の境)、凹石(V-2)、扁平丸石(V-3、VI-2)、条痕ある板石(M-3)、礫石の加工あるもの(M-1、M-2)、礫石(N-2、V-2、VI-3)などであるが、明確に會畑式に共伴するものかどうかについては判明しない。とくに、N-2とV-2出土の小形の棒状の礫石は石質は砂岩で長径7.5cm、短径2.2cmのもので両端にたどきのあとがあった。

土製品

Iトレンチの1区で、土鍔が會畑式土器の尖底に近い内底片と同じレベルで出土した。

土器

須恵器 いずれも細片で、I-1、2、3やN-1、M-1に出土。

青磁 いずれも細片で、Iの1、2、II-1、N-2に出土。

縄文後晩期土器(第6図)

黒色磨研土器の口縁部片(V-3)、一濠式の口縁部片(I-2)、市来式の口縁部片(I-1)の他に、I-4から無文の後期土器の口縁部と考えられるものが出土した。

會畑式土器(第7図～第18図、図版6～8)

本遺跡から出土する土器の主体をなすものである。焼成は割りに良好で、質は細砂を含み、比較的にして、薄手の土器である。一部滑石粉末を混入したものがあつた。

器形は口縁部の外反せるものが最も普通の型で、直口のもは非常に少ない。胴部に少しよくらみを生じ、屈折して底部に至っている。底部は円底を呈するものがほとんどであるが、やや尖底に近い形のものや平底に近い形のものもあるが非常に少ない。

文様は器面全体に施されるのが普通で、籠状施文具をもって細形の沈線をもって文様を描き、直線を多く使用しているが、少数の曲線文もみられる。連点文、平行線文、平行斜線文、綾杉文、蜘蛛巣状文、曲線文等を規則的に組合せ幾何学的文様を構成している。中には出土例は少ないが、不規則な直線、波状曲線を施したのもあり、文様構成にくずれのあるものがある。土器内面の文様は口縁部内面にかぎって多く平行線文、連点文を施してある。口唇部上面は連点文か刻目が施されている。底部は蜘蛛巣状のものがほとんどであるが、平行線文のあるものや無文のものもある。

拓本についてみるに、第7図～第10図は口縁部拓本の集成であるが、ほとんど外反してたものだけであるが、直口のもの(8図4、9図1,9、10図6)もある。第11図から第15図は胴部拓本の集成である。このうち12図11と15図は下腹部底部への移行部付近のもので、15図6は底部である。第16図と第17図は底部拓本の集成を示すが、実測図で示すとおり不安定な円底である。このうち、16図3、6、7は下腹部底部への移行部を示すものである。第18図の実測図は無文の底部であるが、尖底に近い円底(18図1)や平に近い円底(18図3)がある。

會畑式土器については、杉村氏の考察(注6)にもあるように、現在では形式上の分類から3類に大別される。

第1類は會畑式土器の基本的タイプで、佐賀県唐津市西唐津海底出土のもので、細線で深く刻みこんだ羽状文や綾杉文のなかには、朝鮮半島に分布する藤目文土器に類似したものがある。そのため、従来、會畑式土器の祖型を朝鮮にもとめることろみながされてきた。

第2類は、いわゆる熊本県宇土市會畑貝塚出土の會畑式土器で、器形のうえで口縁部が外反したり、文様構成に乱れを生じている。

第3類は鹿児島県大口市山野日勝山遺跡より出土の土器で、従来、日勝山式土器とよばれたものである。器形、文様も會畑式本来のすがたをもってはいるが、胴部にふくらみを生じ、あるいは口縁部が低い波状を生じたりする。とくに、綾杉文や横走する平行線が、弧状あるいは円線化しているのが特徴である。

以上のことから、本城遺跡出土の會畑式土器の器形・文様から考えると第2類の會畑貝塚出土

のものと同様似ていて、第2類として考えてもよいであろう。

會畑式土器の祖型をどこに求めるかについては、上述のように、従来しばしば朝鮮半島南部に出土する細目文土器に對比して注目されてきたが、しかし、會畑系の細線刻文は早期の押型文土器と共存することがしばしばで、大分県早水台遺跡では楕円押型文土器とともに會畑式土器が発見されている。また、熊本県長洲町ヒンデン海底遺跡出土の土器の中には、押型文と押型原体の施文で擦痕による細線刻文のあることから、會畑式土器の文様要素が早期に起源をもとめるといふ賀川氏らの考察もある。(注7)

會畑式土器を縄文時代早期または前期前葉とするかについての二つの意見もあって編年的にその層位調査が要望されていたが、これについては、大分県速見郡山香川原田洞穴出土の押型文、舊式土器、會畑式土器など層位研究から、いわゆる會畑式土器と称される細線刻文土器を前期前葉とすることを認められてきた。

また、會畑式土器の終末については、熊本県玉名郡尾川貝塚出土の資料のC¹⁴測定から、いわゆる會畑式土器の終末の年代をB.C. 3000年前後ではなかったかという研究報告がある。

(注8)

5. ま と め

會畑式土器は、玄海の小島から博多湾、九州西岸および大分県にも分布して、南下して鹿児島から種子島・屋久島まで及んでいて、現在のところ會畑式土器の南限の地である。

本城遺跡の二次にわたる発掘調査によって、種子島における會畑式土器の器形、文様等についての調査の手がかりは得たが、今後種子島における縄文時代の編年をきめるうえで、他の會畑式土器の遺跡や各時期の遺跡についても調査研究の必要があると考える。

〔註〕

- (1) 三友國五郎・河口貞徳・国分直一「薩南諸島の考古学的調査」、考古学雑誌、第39巻第1号(昭和28年5月)
- (2) 鹿児島県教育委員会「鹿児島県市町村別遺跡地名表」(昭和48年5月)
- (3) 前掲注2)
- (4) 前掲注1)
- (5) 国分直一、盛園尚孝、重久十郎「鹿児島県屋久島・瀬遺跡の発掘調査概報」考古学雑誌 第53巻第2号(昭和42年9月)
- (6) 杉村彰一「會畑式土器論考」九州考古学・24号(1965)
- (7) 賀川豊彦、坂田邦洋「會畑式土器に対する一考察」九州考古学・22号(1964)
- (8) 坂田邦洋「會畑式土器に関する研究—會畑式土器の終末について—」日本考古学協会第40回総会研究発表要旨(昭和49年5月)

(盛園尚孝)

图

版

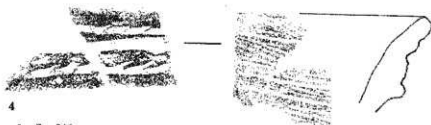


1



2

3

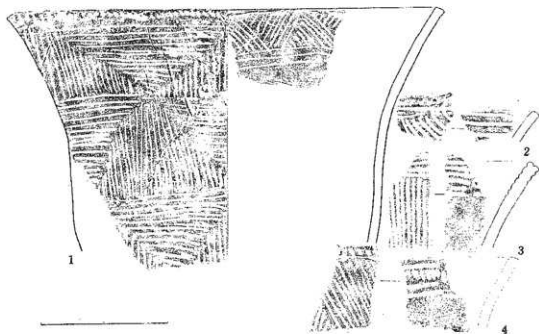


4

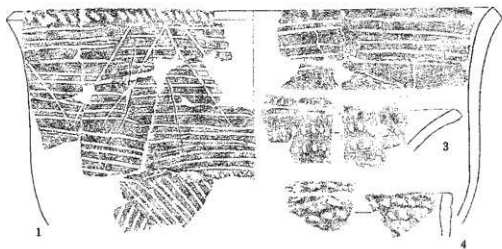
- 1 II-3区
- 2 I-2区
- 3 I-4区
- 4 I-1区

第6图 縄文後晚期土器

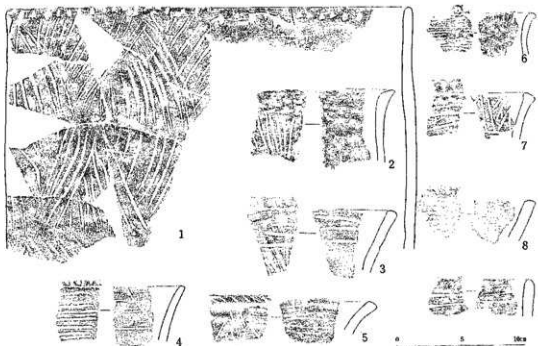
0 5 cm



1 V-3区 3 V-3区
2 I-2区 4 V-3区



第8圖 1 V-3区 4 V-1区
2 V-1区 5 碎断品
3 V-3区



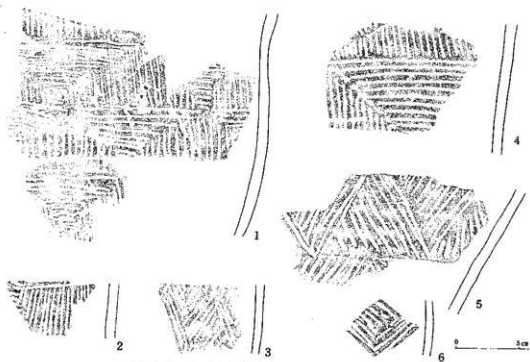
第9图

1	II-4区	4	V-1区	7	V-3区
2	V-1区	5	V-2区	8	II-1区
3	V-4区	6	I-2区	9	V-1区



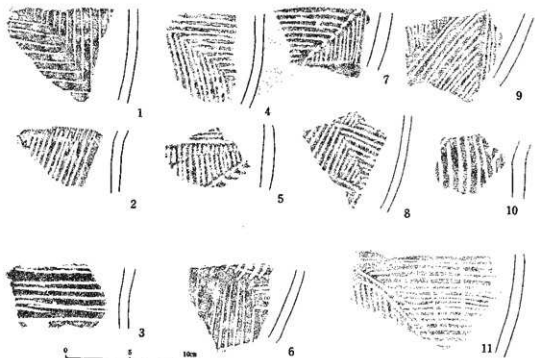
第10图

1	採集品	4	I-2区	7	V-1区
2	II-2区	5	V-1区	8	V-1区
3	V-2区	6	V-3区		



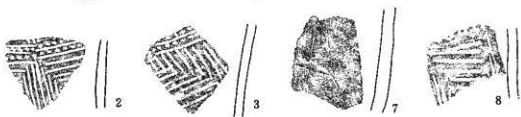
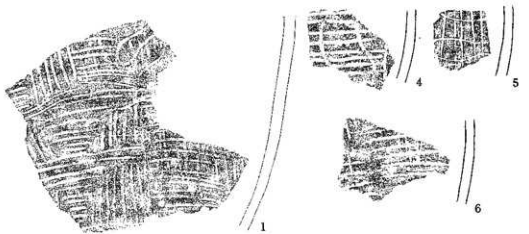
第11图

1 V-3区	4 V-3区	① II-3
2 V-3区	5 V-3区	② II-11
3 III-2区	6 V-2区	



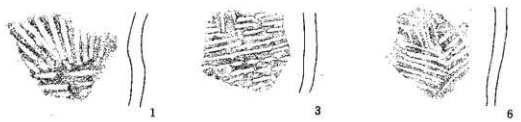
第12图

1 V-2区	4 V-1区	7 V-3区	10 I-2区
2 I-2区	5 V-3区	8 V-3区	11 V-2区
3 V-3区	6 V-1区	9 V-3区	



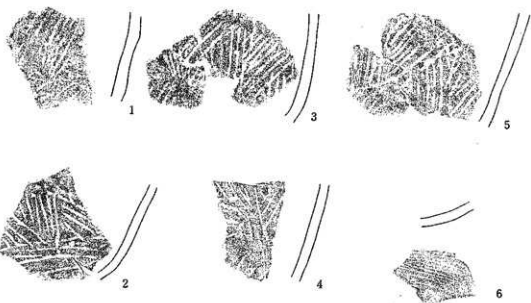
0 5cm

第13図 1 V-2区 2 V-3区 3 V-1区 4 I-4区 5 V-3区 6 V-3区 7 III-3区 8 Vのとりあげ



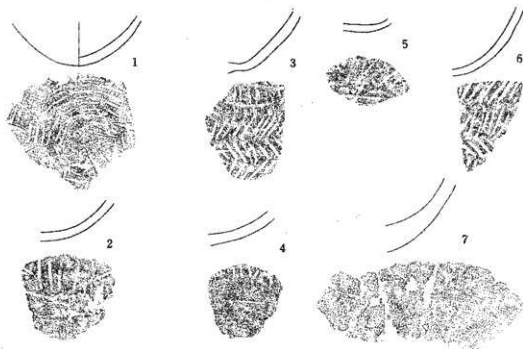
0 5 10cm

第14図 1 V-1区 2 V-2区 3 V-1区 4 III-4区 5 IIIのとりあげ 6 V-2区 7 V-3区



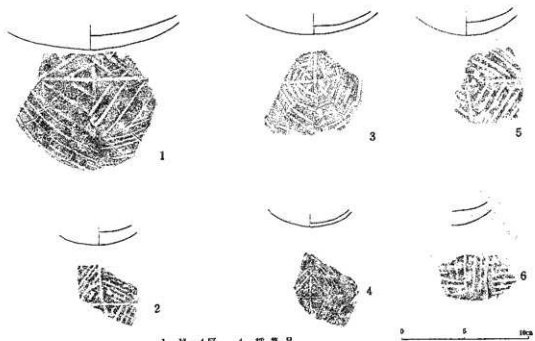
第15图

	0	5	10μ
1	V-2区	4	V-3区
2	V-5区	5	V-3区
3	V-3区	6	V-3区



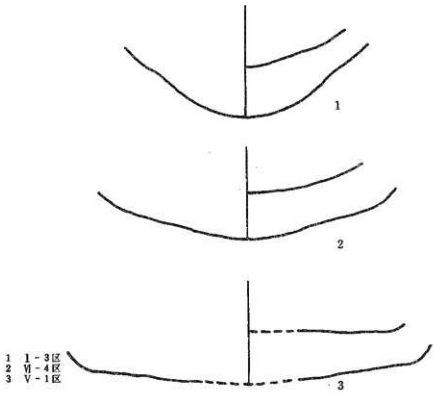
第16图

1	I-1区	4	II-3区	7	I-4区
2	I-2区	5	V		
3	J-2区	6	IV-4区		



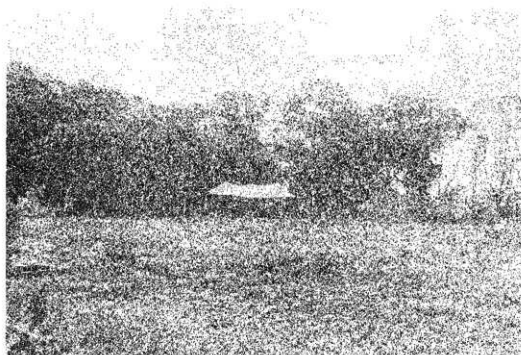
第17圖

- | | | | |
|---|------|---|------|
| 1 | V-4区 | 4 | 探基品 |
| 2 | V-3区 | 5 | V-4区 |
| 3 | V-2区 | 6 | V-4区 |



- | | |
|---|------|
| 1 | I-3区 |
| 2 | V-4区 |
| 3 | V-1区 |

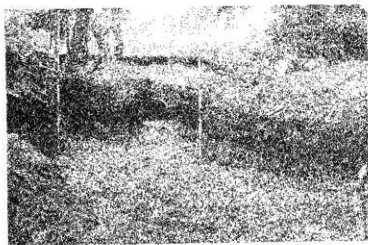
第18圖 曾畑式土器無文底部实测区



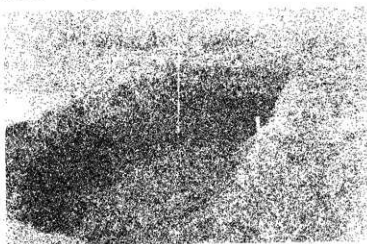
遺跡遠景 (南から北を望む)



I・I・I・Mトレンチ全景 (北から)



ⅠトレンチからⅡトレンチを望む (北側から南の方)

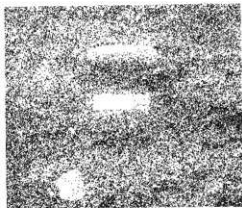


図版 2

Vトレンチ全景



Ⅰトレンチ1区の管壺式土器底部と
土鐘の出土状況



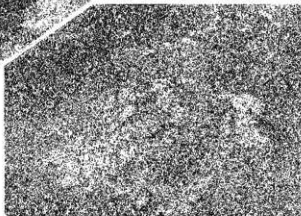
Ⅱトレンチ2区の砕石の出土状況

図版 3

1970年10月10日撮影。1971年10月10日撮影。1972年10月10日撮影。1973年10月10日撮影。1974年10月10日撮影。1975年10月10日撮影。1976年10月10日撮影。1977年10月10日撮影。1978年10月10日撮影。1979年10月10日撮影。1980年10月10日撮影。1981年10月10日撮影。1982年10月10日撮影。1983年10月10日撮影。1984年10月10日撮影。1985年10月10日撮影。1986年10月10日撮影。1987年10月10日撮影。1988年10月10日撮影。1989年10月10日撮影。1990年10月10日撮影。1991年10月10日撮影。1992年10月10日撮影。1993年10月10日撮影。1994年10月10日撮影。1995年10月10日撮影。1996年10月10日撮影。1997年10月10日撮影。1998年10月10日撮影。1999年10月10日撮影。2000年10月10日撮影。2001年10月10日撮影。2002年10月10日撮影。2003年10月10日撮影。2004年10月10日撮影。2005年10月10日撮影。2006年10月10日撮影。2007年10月10日撮影。2008年10月10日撮影。2009年10月10日撮影。2010年10月10日撮影。2011年10月10日撮影。2012年10月10日撮影。2013年10月10日撮影。2014年10月10日撮影。2015年10月10日撮影。2016年10月10日撮影。2017年10月10日撮影。2018年10月10日撮影。2019年10月10日撮影。2020年10月10日撮影。2021年10月10日撮影。2022年10月10日撮影。2023年10月10日撮影。2024年10月10日撮影。2025年10月10日撮影。

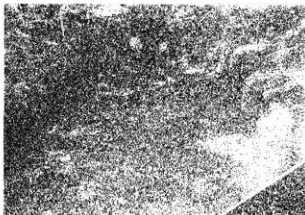


I・IIトレンチ遺物出土状況

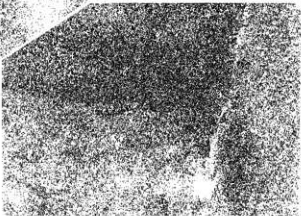


Vトレンチ3区の遺物出土状況

図版4

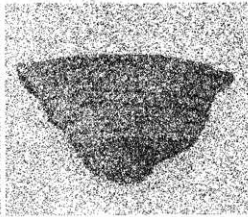
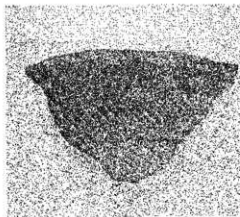
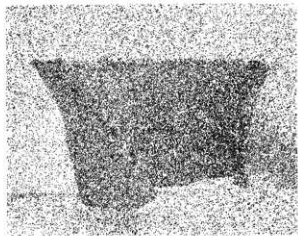
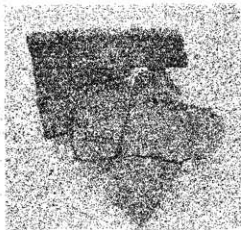
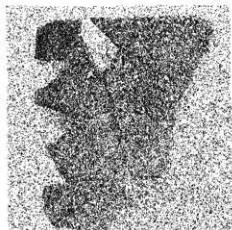


Vトレンチ全景



Vトレンチ1区の遺物出土状況

図版5

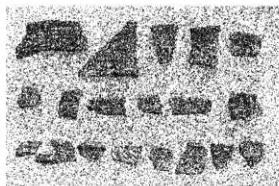


表

管埴式土器口緣部

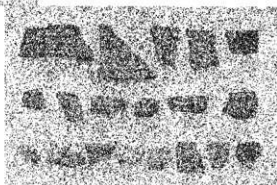
裏

圖版 6



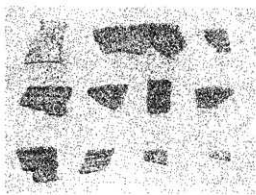
表

I・IIトレンチ出土土器
管袖式土器口縁部



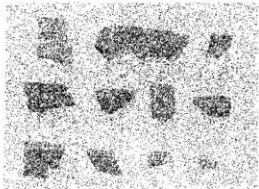
裏

図版 7



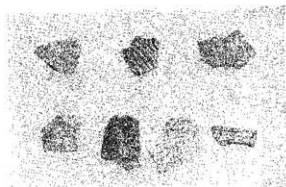
表

Vトレンチ出土土器
管袖式土器口縁部

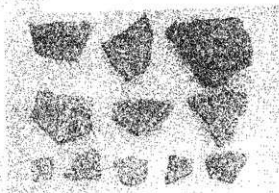


裏

図版 8



I. X. M トレンチ出土土器

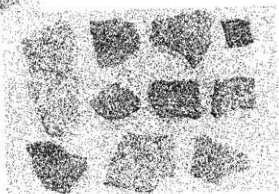


I トレンチ出土土器
管畑式土器胴部

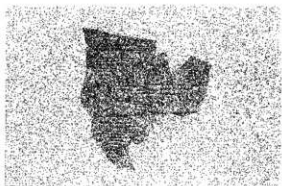
図版 9



V トレンチ出土土器
管畑式土器胴部



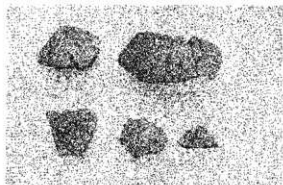
図版 10



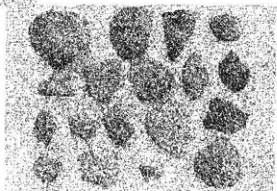
Vトレンチ出土土器
管畑式土器胴部



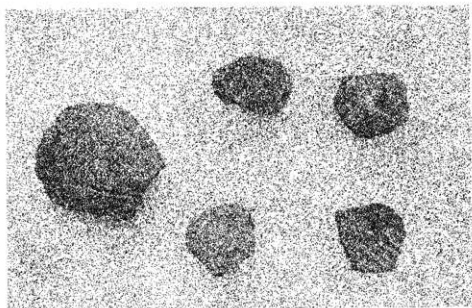
図版11



Iトレンチ出土底部



図版12 I, I, V, Vトレンチ出土の底部
管畑式土器底部



図版13

I・Mトレンチ出土底部
管壺式土器底部

昭和 48 年 3 月 発行

鹿児島県西之表市
本城・田之脇遺跡調査概報

発行 西之表市教育委員会
社会教育課
印刷 西之表新生社印刷

田之脇遺跡

1. 遺跡の立地と環境(第1図・第2図)

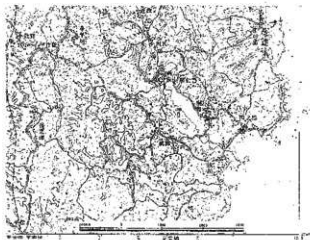
種子島北部の東海岸、田ノ脇から澁川に至る海岸線は平潤にして、北は田ノ脇港、南は澁川にいたるまで砂丘(現和砂丘)が形成されている。この砂丘は後背地が次第に低くなっていて、ごく普通に見られる海岸砂丘であり、砂丘上には松や雑木がはえていて防風林としての役目を果している。

田ノ脇部落は、砂丘の北端に位置し、ほぼ東北に向っている県道国土・安城～中種子線に沿い、砂丘後背地に形成されている部落である。

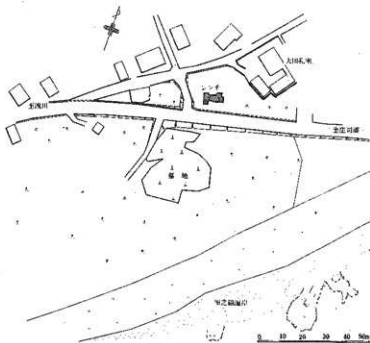
遺跡は、田ノ脇部落の南端、県道に沿って部落共有の墓地があるが、この墓地の北方、県道に沿った標高約10m、広さ約600㎡程の空地があるが、この空地が遺跡である。調査当時は、空地には地主である大田省衛氏によってイスマキが植えてあり、雑木も茂り

岡氏宅の防風防波の役目を果しているところであった。

田ノ脇周辺には、この遺跡の他に、田ノ脇港の後方台地には縄文前期を散布している東方之平遺跡や、北西部には縄文前期土器や弥生式土器、土師器、須恵器等の散布地があり、さらに於佐野の縄文後期、泉原の縄文・弥生の遺跡、澁川の海岸段丘上の縄文後期遺跡と現和地区内にはそ



第1図 現和田之脇遺跡附近地形図 ①遺跡地点



第2図 遺跡地附近地形図

の他相当数の弥生土器の散布が知られている(注1)。

本遺跡は、このような縄文から弥生にかけての遺跡のなかにあって、中種子町増田に所在する鳥ノ峯埋葬遺跡とともに、弥生の埋葬遺跡として注目された遺跡である。

2. 調査までの経過

本遺跡は、昭和36年に県道国上・安城～中種子線の改良工事がおこなわれた。その際、砂丘地を切土して道路の拡幅がなされたとき人骨が発見されたことによって判明した遺跡である。

当時、この道路工事に人夫として働らいておられた田ノ脇部落在住の大田実氏の談によれば、拡幅した道路内に距離にして約1.5m程離れて2体の人骨が発見され、工事中とりあげられ部落共有墓地にまとめて埋葬した。2体とも人骨の上部には自然円礫があったという。遺体には手に貝輪を着装し、あしは曲げていたとのことである。なお、別に1体が発見されたが、このものは直接道路幅に影響がないため、そのまま埋めもどしたということなどを調査中に聞いた。

この埋葬人骨の発見地点に接している大田省徹氏の所有地が、昭和41年度中に宅地として造成され、新しく住宅を建築するとの計画があることを知ったが、そのために遺跡の破壊が予想された。

この遺体の上部に自然円礫をおく埋葬は、種子島では中種子町増田鳥ノ峯遺跡(注2)が知られているが、砂鉄採取によって西之表市伊間の同様の埋葬遺跡が未調査のままで破壊された例もあり、種子島における弥生時代の埋葬を知るうえに注目すべき遺跡の一つとして、また、南種子町広田の埋葬遺跡との関連を知るうえからも価値ある遺跡として、調査をおこなったものである。

調査は、41年3月26日から30日まで、地主である大田氏の要望もあって、ヒトツバを去けた地点を選び最小限の試掘程度にとどめ、1体だけしか調査しえなかったが、鳥ノ峯遺跡と関連ある埋葬遺跡であることが判明した。

調査は次のようなメンバーによっておこなわれた。

調査主体者 市長 名越不二郎

総務 徳永勉(市教委総務課長)

調査担当者 盛園尚孝(調査責任者)

田上利男(市教委社会教育主事)

調査参加者 鍋木三郎・里居秀世・石丸修・牧瀬三則・野副三重子・中田悦美・稲子里美子(以上、中種子高校郷土クラブ員)

3. 人骨の出土状況

(1) 層序(第3図・第4図)

発掘地点は、果道に沿った約600㎡程の広さを有する砂丘地で、ヒトツバが植えられ、その間に雑木があり、この空地に隣接の地主である大田氏宅の防風防波の役目を果たしていることは前述した。

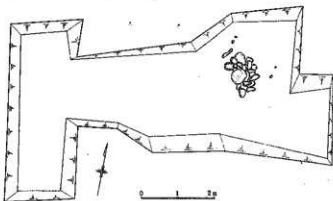
発掘は、大田氏の要望もあってヒトツバを去けて最小限のトレンチを果道に接して設定し、雑木を除去し、2×5mの広さ(I・II・III区)と

これに直交する2×4mの広さ(IV・V区)のトレンチをあけた。

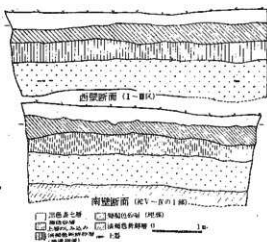
調査は樹根部のある第1層の黒色表土層の排土からかかった。この層からは自然円礫や角礫の石塊やキクメイシ等のサンゴ塊が散見され、現代陶器片や磁器片、瓦片が出土している攪乱層である。なお、トコブシやヒメクボガイ、オニシシ、タカラガイ等の海産貝や、砂丘形成途中で混入したと思われるヤマタニシ、ウスカワマイマイ、ヒメヤマクマ、ニホンマイマイ等の陸産貝がひんびんとして出

土した。この黒色表土層は20~40cm程で、次層の褐色砂層となる。この砂層は表土層の有機質のしみこみ層と考えられるが、この層からも自然円礫や角礫、サンゴ塊、海産陸産の貝がらとともに、現代陶器片や瓦片等が混在していて、攪乱層であることが判明した。この2層は15~40cm程の厚さで、第3層の淡褐色の新鮮砂層に続くが、全くの無遺物層で35~45cmの厚さで、3層下部(地表面下90~100cm)でほぼ地層が水平に安定している。

第4層は 褐色砂層で、この層になると自然円礫や軽石塊がひんびんとして発見され、僅かでは



第3図 発掘トレンチ平面図



第4図 壁面実測図

あるがヒメコボガイ等の海産の貝の他、ガザミと考えられるカニの脚等が出土している。この4層の発掘中、V区の東北隅にまとまって軽石塊があるのが発見されたが、この面で整理中、礫面に自然円礫が包含していることが判明した。このため、作業はこの自然円礫を追求することとし、トレンチの北東部へ拡張区(7.5 m²)を新たに設定して作業を進めたが、作業中、両壁面の崩壊もあり、これらの整理掘り下りも平行して行ったため、この広さ5.5 mをさらに拡張したことになった。

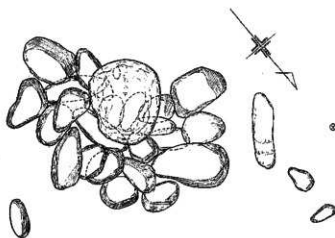
これらの作業の結果、拡張区において地表面下約1.4 mの深さで、サンゴ大塊を発見し、さらに、この下位に自然礫がまとまっている遺構の状況が明らかになった(図版1)。

この第4層は厚さ60~70 cmで、第5層の灰褐色砂層に続くが、この層は全くの無遺物層である。

(2) 遺構(第5図、図版1~3)

遺構は前述のように、地表面下約140 cm程のところ(基準線より-112.5 cm)にあらわれたが、上部に大サンゴ塊(45×34 cm)を配し、その下部に砂岩の自然円礫を長軸の方向はほぼ南北にむいて長方形に、長軸の長さ125 cm、幅85 cmの範囲に配石してあった。

さらに北西側には15 cm程離れて長円の自然礫があるが、この礫はこの遺構に付随するものであるかは判明しない。自然礫は中央部においては三重にかさなっていて、24個の礫を用い



第5図 覆石基実測図



図版1 トレンチ内における覆石基の出土状況(西側から)

て配石している。これらの跡は遺構の中心部において斜めになっているが、これはサンゴ塊の重みのためと、下位にある遺体の腐蝕等による落ちこみと考えられる。

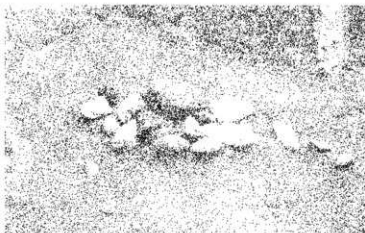
跡は何れも種子島に産する古第三紀層をつくる硬質の砂岩で、この田之脇海岸にも普通にみられる岩石である。

(4) 人骨(第6図、図版4)

遺構を除去すると、下位にある跡より約20cmの深さで人骨が発見された。

人骨は、頭、両肩、両腕に5個の自然磨が配石され、これらの配石にかこまれた形で埋葬されていた。

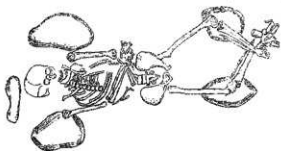
体軸の方向は南東で、顔面は南側をむいている。脚を少し曲げた仰臥屈伸である。頭蓋骨は真肉後、上部の自然磨ないしは土圧による重みによって落ちこんだらしく、鎖骨左は下顎の隅方に突出、脊椎骨も途中で曲がっている。



図版2 東側からみた覆石墓



図版3 西側からみた覆石墓



0 50cm

第6図 人骨実測図

左手首から指骨は右手首の
下位ならびに左骨盤の横に
落ちこみがみられる。

九州大学医学部解剖学の
水井昌文教授によると、30
才台の男性骨で、歯は磨も
うし、上顎左側切歯に抜歯
の痕跡があり、頭骨は想頭
で、これらは広田、鳥ノ峯
の埋葬遺跡の人骨とその類
向は同じであるとのことで
あった。



図版4 西側からみた人骨

なお、人骨を埋葬するため砂丘地にどのような坑を掘ったかは、砂丘地のため判明しえなかった。

4. 遺物

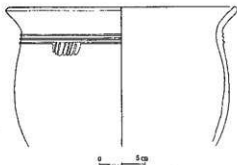
(1) 自然遺物

1層、2層の攪乱層からは、自然礫や角礫とともに、キクメイシ等のサング魂、トコブシ、ヒメクボガイ、オニニシ、タカラガイ等の海産や砂丘形成とともに混入したと考えられるヤマタニシ、ウスカワマイマイ、ヒメヤマクルマ、ニホンマイマイ等の陸産貝が出土した。

遺構や人骨の出土した4層からは、自然礫や軽石塊が担当量出土していて、その他、ヒメクボガイ等の海産の貝やカニの脚が出土した。

(2) 土器(第7図・図版5、第8図)

土器の出土は非常に少なく、壁面の整理中再壁断面にⅠ区およびⅢ区から出土したのみである。深さは地表面下70cm程のところ、甕の口縁部破片である。胎土は粗く、砂粒や雲母を含んでいる。頸部に3条の凸帯があり、さらにこの凸帯に接して、たてに6条の凸帯がつけられている。



第7図 甕形土器実測図

第8回は発掘終了後において、空地造成が進められたが、この工事中、市教委で採集された土の底部であるが、参考資料としてあげておく。

5. むすび

発掘は地主の要請もあって試掘程度にとどまり、人骨1体のみの発掘にしかすぎなかったが、このような、遺体の上に石組みの構造を有する遺構は中種子町増田の鳥の峯遺跡にみられ、覆石墓と名づけられている。立石を伴う円形の覆石墓を中心とした長方形覆石墓の一群と、円形ないしは楕円形覆石墓の一群とあり、後者の埋葬人骨には遺体の周辺に石をならべた配石墓の風習もあわせかかっている、この田ノ脇の埋葬法と類似している。

このような覆石と配石をもつ埋葬がおこなわれた時期については、出土の土器によっておそらく弥生時代後期と考えられる。

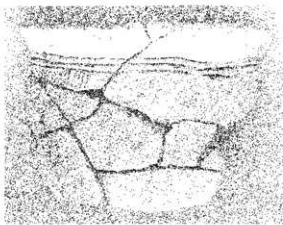
現在のところ、このような埋葬法をもつ例は、宮崎県の船遺跡にもみられるが、この遺跡では弥生前期の変棺を混在している。

遺体の周辺に石をならべる配石墓は、広田遺跡や山口県土井ヶ浜、長崎県大浜等の各遺跡が知られている。このような覆石や配石は砂丘埋葬地に発見例が多く、弥生の前期から後期にかけて行なわれている。現在のところ分布範囲は山口・鳥根・宮崎・鹿児島周辺の地域に発見されている。

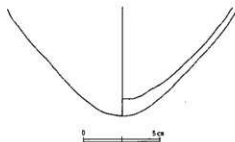
おそらく覆石は、埋葬終了後の標識として地表面に石を配したものと考えられる。

注1. 鹿児島県市町村別遺跡地名表、昭和48年、鹿児島県教育委員会

注2. 鹿児島県鳥ノ峯埋葬遺跡の調査、日本考古学協会第28回総会発表要旨、1961
 河口、永井、三島、袴田、重久、諏訪、盛園の発掘調査、1966年(第2次調査)
 国分、永井、河口、盛園等の発掘調査、1971年(第3次調査)
 中種子町葬土誌、昭和46年



図版5 壺形土器



第8図 壺形土器実測図

(盛園尚孝)

昭和 48 年 3 月 発行

鹿 児 島 県 西 之 表 市
本 城 ・ 田 之 脇 遺 跡 調 査 概 報

発 行 西 之 表 市 教 育 委 員 会
社 会 教 育 課
印 刷 西 之 表 新 生 社 印 刷